



連載

指揮者の  
仕事場  
探訪

INTERVIEW WITH MAESTRO AT HOME >>>

# 藤岡幸夫

SACHIO FUJIOKA

今回ご登場いただいたのは関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者の藤岡幸夫。本邦初公開となる“仕事場”は学生時代から使われている、隠れ家のような部屋だった。そこに眠る“お宝”について1つひとつ話を伺って行くと、それに込められた思い出があふれるように語られていく——恩師からの言葉、薫陶を受けた音楽家とのエピソードなど、いかに“指揮者・藤岡幸夫”がかたちづくられてきたのかが伝わってきた。

取材・文=片桐卓也 写真=堀田力丸  
Text=Takuya Katagiri Photo=Rikimaru Hotta



【上】輝かしいキャリアを積み重ねた今でも、「指揮者を志していた時の自分に戻ってしまう」お部屋  
【左】いまでも使用しているというラジオと録音機能付のウォークマン。ウォークマンは敬愛する師・渡邊暁雄に自分のピアノ演奏を自分で聴くようにと買われて購入したのだという

隠れ家、という言い方はちょっと大変なかもしれないが、芸術的な創作活動に携わる人は誰でも、自分だけのアイデアを練る場所が必要なのだと思う。指揮者も同じだ。そんな隠れ家的な雰囲気を持つ部屋、それが今回紹介する藤岡幸夫の仕事部屋である。彼の美家の奥まった一角にその部屋はある。

「ここは今まで、他人をほとんど招き入れたことがない」と藤岡。それほど広くはないが、壁一面にスコアが詰まった本棚、CDの詰まったラックなどが置かれ、小振りなグランドピアノ、そしてオーディオ機器が置かれている。

「この部屋は、実家を建て替えてからこんな風に使っているのですが、もともとこの場所は、古い家だった時でも子供部屋だったところ。だから建物は変われども、子供の頃からずっとこの場所で生活してきたという部屋でもあります」

そして、インタヴューの最初に、ぜひこれを撮影して、と言って藤岡が持ち出して来たのが、1本の指揮棒だった。

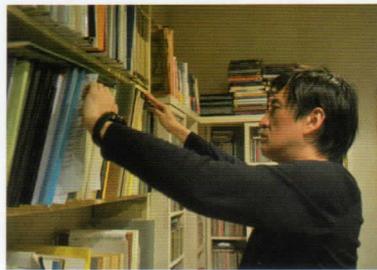
「これはショルティが実際にコンサートで使った指揮棒で、そのコンサート後に僕に手渡してくれたものです」

イギリスに留学した後、マンチェスターのBBCフィルハーモニックで副指揮者の任にあったとき、サー・ゲオルク・ショルティが振る公演の前に、まったく同じプログラムを演奏会や放送用録音として指揮させてもらえるというチャンスを得たことがあった。そしてR・シュトラウス《ツァラトゥストラはかく語りき》などを指揮した。

「その時にショルティからさまざまにア



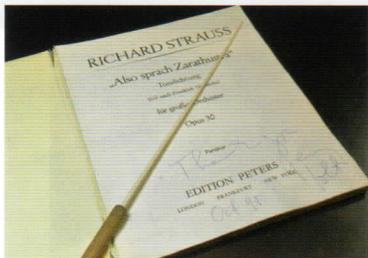
手あかのついたショルティの指揮棒



お宝が眠っているか確かめてもらうと……



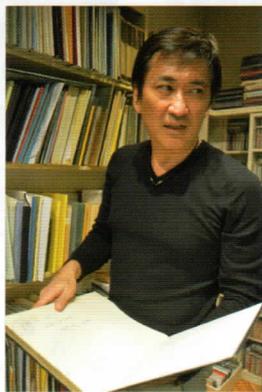
机のむかいには、楽譜がひしめきあうように入られている棚が



ショルティからはサインが入ったR.シュトラウス《ツァラトゥストラはかく語りき》の楽譜も



初めて指揮をしたヴィヴァルディの協奏曲の楽譜。尊敬する指揮者の1人である、岩城宏之のサインが入っている



渡邊暁雄に初めてもらった楽譜

## PROFILE

### 藤岡幸夫 Sachio Fujioka

慶應義塾大学文学部、英国王立ノーザン音楽大学指揮科卒業。「サー・チャールズ・グローヴス記念奨学賞」を特例で受賞。1993年BBCフィルの定期演奏会が「タイムズ」紙などで高く評価された後、1994年に「プロムス」でBBCフィルを指揮してデビュー。以降数多くの海外オーケストラに客演。マンチェスター室内管弦楽団首席指揮者、日フィル指揮者を歴任し、2000年に関西フィル正指揮者、2007年より首席指揮者を務める。毎年40公演以上を指揮する同楽団とは今年15シーズン目にて、一体感あふれる演奏は常に聴衆を魅了し高く評価を得る。2002年渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。公式サイト <http://www.fujioka-sachio.com/>

## 指揮者 の 仕事場 探訪

ドヴァイイスをもらったのですが、一番強く残っているのが「指揮者は指揮台に乗ったら、最後まで諦めるな」という言葉。その言葉と共に、彼が演奏会で使った指揮棒を僕に手渡してくれた。それ以降、僕にとって、その言葉とこの指揮棒が宝物になりました」

藤岡が指揮者を志したのは小学校4年生の時。ピアノとチェロも習っていたが、さらにソルフェージュなども習い出した。しかし、指揮者になりたいと語る藤岡に対し、両親の出した条件は、大学まである一貫校に入って勉強することだった。それで中学校から慶應に通い、慶應義塾大学文学部を卒業した。

「親の気持ちは今にしてみればよくわかりますよ。指揮者になるのは大変だから、きっと大学まで普通の学校に行けば、その間に諦めるだろうと思っていたのでしょー」

音楽家のエピソードにはそうした事例は事欠かない。しかし指揮者への情熱はまったく衰えなかった。渡邊暁雄の門戸を叩き、内弟子となる。

「最初の1年間はずっとピアノばかり弾かれました。ベートーヴェンのピアノ・ソナタ。作品の構成から強弱のニュアンスまで、こと細かに。そして最後に、隠し録りした僕のピアノ・ソナタの演奏のテープをもとに『これを指揮しなさい』という課題が出ました」

それが指揮者への第一歩だった。渡邊に言われ、その時に買ったウォークマン（カセットテープ用の）はいまだに使っているそう。その後日本フィルハーモニー交響楽団の指揮研究員として研鑽を積み、1990年にイギリスのマンチェス

ターにあるロイヤル・ノーザン・カレッジ・オブ・ミュージックに留学。そこでは「サー・チャールズ・グローヴズ記念奨学賞」を受賞する。海外から来た指揮科学生がこの賞を受賞するのは画期的なことだった。そして1993年にBBCフィルハーモニックの定期演奏会にデビュー、翌年にはBBCフィルの副指揮者となり、プロムスへもデビューした。そしてマンチェスター・カメラータ(室内管弦楽団)の首席指揮者、日本フィル指揮者となる。

「日本の音楽大学を出ていないので、よく指揮者になりましたね、と不思議がる方がいまだに多いのですが(笑)」と藤岡。彼の変わらない指揮への情熱は、いま関西フィルハーモニー管弦楽団に注がれている。

「2014年で15シーズン目になる関西フィルとの関係は、いま僕にとっても最も大事なものです。はっきり言って関西フィルに命をかけています」

その出会いの作品はシベリウスの「交響曲第一番」だった。

「当時、同じ時期に、海外を含むいくつかのオーケストラでシベリウスの『第一番』を何度か振る機会があったのですが、その中で一番素晴らしいのが関西フィルだった。その時に、僕はこのオーケストラと一緒に生きて行くのだと直感したのです」

その後、関西フィルと藤岡の関係は深まり、2007年からは首席指揮者を務めている。

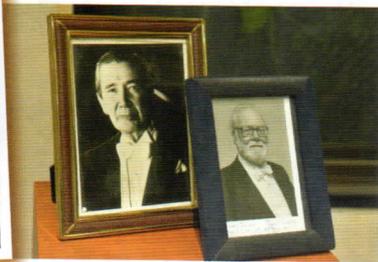
「この15年ほど、年間40回以上、関西フィルとの演奏会を行って来ましたが、こんなに密な関係を持つオーケストラと指揮者は他に無いと思います。そして毎年



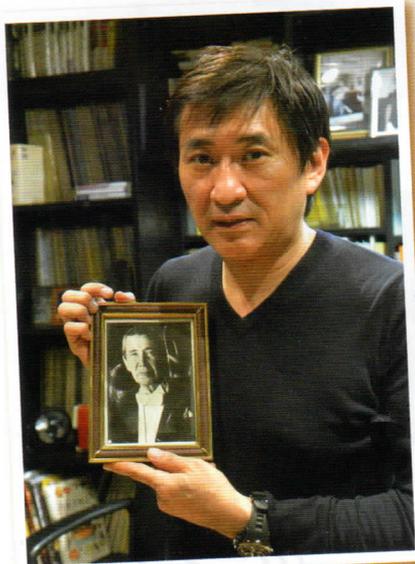
昨年開催された吉松遼暦コンサート(鳥の響展)のとき撮影されたもの。藤岡、吉松、富田勲、K.エマソンという豪華メンバー



関西フィルとの公演の際に撮られた1枚。藤岡と関西フィルとの平均集客率は9割を超え、15年にわたる活動が実を結びはじめている



マンチェスター時代に共演したイングリッド・ヘブラーとの1枚(左は奥様の典子さん)。ヘブラーのプロフェッショナルとしての姿勢を間近で感じ、胸を打たれたという



【右上】師匠である渡邊暁雄、サー・チャールズ・グローヴズの写真は並んで大切に飾られている【上】藤岡によればこの写真は笑っているようにも怒っているようにも見えるらしい……



渡邊暁雄らに探してもらい購入した中古のピアノ。いまでも大切に使用している

【公演情報】

関西フィルハーモニー管弦楽団 第256回定期演奏会

〈日時〉5月17日14時 ※13時40分～ 藤岡幸夫によるプレトーク有(会場)ザ・シンフォニーホール(共演)朴 瑛実(S)、谷地欽晶子(A)、畑儀文(T)、小玉晃(Bs)、関西フィルハーモニー合唱団(曲目)ドヴォルジャーク「レクイエム」(問合せ)関西フィルハーモニー管弦楽団 06・6577・1381

東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団 第280回定期演奏会

〈日時〉6月7日(会場)東京オペラシティ(共演)ハオチェン・チャン(p)、ハイドン「交響曲第49番〈受難〉」、ラフマニノフ「パガニーニの主題による狂詩曲」、ヴォーン・ウィリアムズ「交響曲第5番」(問合せ)東京シティ・フィル 03・5624・4114

聴衆の数も増えている。聴きに来てくれる聴衆も、かなり若い世代、特にカップルが多くなった。僕としては、ようやくスタートラインに立った、そういう気持ちです。聴衆を開拓し、オーケストラの演奏水準をあげ、これからは本場のスタートだと思っています」

シヨルティの言葉と共に藤岡が胸に刻んでいる言葉がある。それは師である渡邊暁雄が語った言葉だ。

「指揮者は必ずボロクソに言われる。けれど、そこで怒ったり、がっかりしたりせずに、その言われた言葉を自分の肥やしにしないさい、と。それができるようになれば、指揮者として成長することが出来るということなのでしょう」

藤岡が関西で多くの活動を行うのは、クラシック音楽の受容も東京に「一極集中」しすぎている今の状況に危機感を覚えるからだ。東京以外の地域が活性化しないと、クラシック音楽そのものも広がりを持たなくなると。かつては朝比奈隆と大フィルのように、個性的なオーケストラと指揮者の関係があった。そういう個性的なオーケストラが日本全国に出来てくれれば、クラシック音楽の状況はもっと楽しくなるはずだ。

この小さな部屋から、藤岡の想いは果てしなく広がって行く。